

## 谷川：一ノ倉沢南稜

- ◆日程 2019年7月13日(土)
- ◆メンバー L：須田、岡村、前田、小山田、大山
- ◆天候 曇りのち雨

金曜の夜に私は岡村さん、大山さん、小山田さんを途中でピックアップしてから10時に海老名SAで前田さんと合流して、車2台に分乗して谷川岳に向かった。深夜1時に谷川岳ロープウェイ駐車場に到着。すぐにテントを設営して仮眠を取る。

4時に起床して4:30出発。すでに外は明るくヘッドランプは必要ないが、ガスが掛かっている小雨も降っている。雲の切れ間から時々晴れ間も見えるが一ノ倉沢の方は濃いガスに覆われている。それでも今日は天気を持つという予報を信じて先に進んだ。



1時間で出合に着きそこから沢に入って遡行して行く。右岸から左岸に一度徒渉してからうっそうとした樹林帯の中を進むと、昨晚もかなり雨が降ったようでズボンがびしょりになってしまった。しばらく樹林帯の中を歩いてから沢に降りると雪渓がしっかりと残っていてかなり上部まで残っているようだ。雪渓が使えるとアプローチがかなり楽になる。ただ傾斜のキツイところでは滑って歩きづらかったので途中からチェーンアイゼンを付けて歩いた。サクサクと登っていたらいつの間にかテールリッジを100mも過ぎていた。去年と比べて雪渓の量が多くて景色が全く違って見えた。テールリッジの基部まで戻り雪渓から移って登り始める。前には2人組のパーティーがいて、このパーティーが唯一この一ノ倉沢で見かけた登山者だった。

テールリッジからはロープこそ出さないがここから登攀開始といった様相で、残置のフィックスロープを利用して登っていくが、岩が濡れていて滑りやすい。乾いているときと違ってこんなところでも慎重に行動しなければならなかった。テールリッジを上り詰めると中央稜の取り付けで、先の2人組が登る準備をしていた。かなり年配の男性と若者という取り合わせで、大量のガチャ類を腰にぶら下げていた。我々は南稜を登るんですよ、と話しかけると、午後からはもう少し天気が良くなると思うんだけど、などと少し話をして、そこでちょっと休憩をしてから南稜に向かう。途中沢のようにジャカジャカ水が流れていて水を避けながら進まなければならなかった。帰りのことを考えて下降用の懸垂支点の場所や地形をよく観察しておいた。念のためであったがまさか後で役に立つとは思わなかった。

南稜テラスに着いて登攀の準備をする。いらないものは大きなビニール袋にまとめて置いておく。私は小山田さん、大山さんと3人パーティーになり、岡村さんと前田さんが2人パーティーで行動する。まずは私がトップで1p目を登り始める。

1p目はスラブ状の凹角から左のカンテを越え、バンドを右に行ってからチムニーを登るとテラスがある。出だしのスラブでさえいつもの様にはフリクションが効かずかなりビビる。何とかチムニーまで行くが脚で突っ張っても滑って身体が上がらない。何度か試みるがどうしても上がらない。いっそのこと誰か登ってきてもらって肩車でもしてもらおうか、などとアホなこと

を思ったが自分で何とかするしかない。仕方なくハーケンを1本打ってヌンチャクを掛けA0で突破した。情けないが登らないことにはどうしようもない。すでに汗だくだくである。小山田さんも根性で続き、大山さんは軽やかに登ってきた。

**2 p 目**は凹状を右上しバンドを左に出てフェースを直上する。ここは簡単なはずだが前回よりも難しく感じた。一步一步確かめながら確実に登っていくと草付きの緩傾斜帯に出る。ここはビレイせずロープを持って3人で登る。

**3 p 目**は20mの短いフェースでルーフの下をくぐるようにいったん左の6ルンゼ側に行き右のリッジの方へ出る。このピッチは小山田さんに任せた。まさかりードで登ることはないと思っていたようでビックリしていたが、彼女の実力なら問題なく登れるだろう。南稜は去年に続いて2回目だし、リードで登れば自信も付く。案の定、安定感のある動きで登り切った。

**4 p 目**は6ルンゼ側の岩場から右のリッジへ上る。ここは大山さんをお願いします。右から回り込むルートが一般的だが、左側から登る方がいいと判断してそちらから登ろうとするが難しいようで、少し戻ってからリッジに上がっていった。大山さんは今回が初めての本チャンなので普通ならリードをするのは早いのだが、登るスキルだけで言ったら私よりも上手なのであとは経験を積むだけだ。岩登りにはルートファインドが大切なのでそれは経験でしか上達しない。

**5 p 目**は馬の背リッジから奥壁側のクラックを登る。ここは右に烏帽子沢奥壁がすっぱりと切れ落ちた、高度感抜群のリッジだ。岡村・前田パーティーが先頭に代わっていたので私がここはリードで登る。リッジを跨ぐようにして越えていく。

最終の**6 p 目**は逆層で傾斜のキツイフェースだ。特に最後の5mが立っていてA0で登らないと難しい。大山さんに任せると流石の登りで最後まで登り切った。

この時点ですでに15時過ぎで、6ルンゼを懸垂下降で降りていくのだが、安全面を考慮して2パーティーに分けずに1パーティーで降りていくことにした。終了点から5mのところには下降支点があり、懸垂下降のセットをして私がトップで降りていく。途中チムニーがあり脚を突っ張ったり空中懸垂をしながら40m降りるとガッチリした支点があるのでそこでピッチを切る。

2回目の懸垂で20m程下降してから上から見て左側にトラバースしてルートを確認する。南稜ルートの方に行きたかったのだがまだ馬ノ背リッジ上の方だったのでトラバースして来た方に戻って6ルンゼを再び降りる。45m降りていい下降支点を見付けてピッチを切る。ただ下方を見ると南稜ルート方向にトラバースするルートが見つからなかった。やはり先ほどトラバースして確認したルートから南稜ルートに入って下降するようだ。登り返すには降り過ぎてしまったのでこのまま6ルンゼを下るしかない。まずいことに雨も降ってきて、すぐに下降ルートも沢のように水が流れ出した。皆が降りてくる待ち時間にレインウェアの上を着た。それから3回ほど懸垂下降を繰り返しやっと本谷バンドに降り立った。草付きを左に50mトラバースして南稜テラスにたどり着いた。

もう時間は20時で当然真っ暗、しかもガスっていてヘッドランプで辺りを照らしてもぼやけてかなり見づらい状態だった。まだ下山連絡が無く心配しているだろうから会に現状報告のメールを入れた。メンバーにも心配させない程度に家族に連絡を入れるように指示する。

この後どういう行動を取るべきか考えてみた。よさそうなところでビバークするかこのまま下降を続けて下山するか。ビバーク用の装備としてツェルト2個、ガスとヘッド、食料と水はかなり残っている。ただし皆全身ずぶ濡れで低体温症も心配だ。また明日の天気予報も雨で回復の兆しはない。下山する場合は少なく見積もってもあと4時間以上、午前0時は過ぎてしまうだろう。小雨が降っていて真っ暗でガスも出ている状況では安全に下れるようにできるだけ懸垂下降を続けて降りる必要がある。すでに16時間行動しているのでメンバーの体力と集中力が持つか心配だ。こんな状況だが下山ルートは落ち着いて判断すれば間違えずに降りられるという自信はあったので、事故の無いように十分気を付けて下山し、状況によっては途中でビ

パークするつもりで降りることにした。

**南稜テラス**を降りてすぐの壁に懸垂支点がある。ここは上がってくる時に場所を確認しておいたのですぐに見つけられた。ロープをセットして50mいっぱい懸垂する。そこから中央稜の取り付きに向かってトラバースしていく。ホントに沢のように水が流れていたが、クライミングシューズは全く滑らず安心感があった。

取り付きから**テールリッジ**を降り始めるとすぐのところでツェルトが2つあるのが見えた。中央稜を登っていた2人組がビバークをしていたのだ。こんばんは！と声を掛けたら少し驚いた様に返事が返ってきた。お互いに気を付けて、と声を交わして再び歩き始めた。安全な所はそのまま歩き、危険箇所は懸垂下降する。2ピッチほど降りて少し風の当たる場所で寒かったのでツェルトを出してしゃがんでかぶって待つ。小山田さん、大山さんが降りてきたら交代で休憩してもらった。ツェルトをかぶっていると暖かく安心感もあるのか一瞬眠ってしまった。たった10分ほどだがちょっと休めたようだ。そこからまた2ピッチ懸垂するとやっと雪溪に辿り着いた。

休憩をしてから靴をアプローチシューズに履き替え、チェーンアイゼンを付けて下り始める。ガスが濃いので樹林帯への入り口を見逃さないように注意しながら降りていく。入り口を上手く見つけられて一安心かと思ったら最後に渡渉が待っていた。沢の水量が半端なく流されないようにどこを渡るか判断に迷った。岡村さんが少し上流側のところが流れが弱そうだ、とアドバイスしてくれたので私が先頭で渡ってみると確かに見た目ほど流れがきつくない。一人ずつロープなしで渡渉して、河原沿いに歩くと**出合い**の橋に出た。時計を見ると午前2時。遅すぎる下山だったが全員無事だ。いつもよりかなり力強くみんなと握手を交わして健闘を称えあった。本当にお疲れ様でした！！

駐車場までの1時間。アスファルトの上で気が緩んだか、見えないはずの岩が目の前に現れて急に止まったり、半分寝ながら歩くのでカーブでガードレールにぶつかりそうになったりと不思議な体験をした。後から聞いたらみんな同じような感じだったらしい。すぐに車を運転して帰るのは無理だったのでまたテントを立てて3~4時間寝た。さすがに寝付けなかった人はいないようだ。

今回の山行は反省点の多い山行であった。ここ数年、一年に最低一度は岩の本チャンを実施してきて、今年もかなり前から7月の3連休での実施を計画していた。ところが今年の梅雨は稀に見る雨続きで予定していた岩トレが3週続けて中止になっていた。また、予定していたメンバーからベテランの日比野さんが膝痛のため直前で抜けることになった。日程も3連休の初日に午後から余裕を持って移動してしっかり睡眠を取ってから早朝から行動するつもりだったが、3連休の初日以外は雨予報だったため急遽仕事終わりの金曜夜に移動することとした。そのため仮眠程度しか寝られず、出発時間も遅れることとなった。

天候の判断も難しかったが結果的に予想よりも悪い方向に行ってしまった。天気予報から1日持つかと思っていたが朝から降ったり止んだり、時々晴れ間も見えたが夕方からは本降りになった。谷川の天気は特に変わりやすいが自分たちに都合よく判断してしまった。

人数もやはり5名だと多く、適正人数は3名までだろう。特に懸垂下降に時間がかかったので普段の反復練習でもっとスピーディーに下降できるように訓練が必要だ。ビバークするべきだったか否かは判断が分かれるところだが、正しい判断をしたと思っている。

しかしながら今後のことを考えると5人でツェルト2つというのは少ないのでツェルトは1人1つ持つのが良いだろう。

最後に今回の山行は下山予定時刻を大幅にオーバーして皆さんにご心配をお掛けしたことは大変申し訳なく思っています。今後はこのようなことが無いように一層の精進・練習を重ねて安全登山が出来るようにしたいと思います。

(記：須田)

CT：谷川岳ロープウェイ駐車場 4:30—一ノ倉沢出合 5:30—南稜テラス 8:30  
-登攀開始 9:00- 4 p 目 11:30-終了点 15:00-下降開始 15:30  
-南稜テラス 20:00—一ノ倉沢出合 2:00-駐車場 3:00

(同行者コメント：岡村)

前回同ルートのコースタイムを見ると、終了点から南稜テラスまで2時間40分、同テラスから一ノ倉沢出合いまでも2時間40分となっていて、その程度の時間がかかるという認識だったから、「最後の1時間はヘッテンを使うかもしれないけど、どうにかなるかな」と私は思っていた。時間計算に雨や濡れた岩という状況の変化を織り込めなかったことが、私の今回の最大の反省点である。

「懸垂下降に時間がかかりすぎている」ということが皆の脳裏をかすめるようになっても、須田Lは冷静さを失うことはなかった。「日没に間に合わせよう」等といって皆を急がせることもない。とにかく安全重視だった。私だったらああいう風にできたかは、考えると自信があるとはいえない。さらに濃霧の中、闇に包まれ、南稜テラスから中央稜取付点までは沢の中を歩くようであり、本当にここがルートか目を疑うばかりで、「これは明るくなるのを待つべきか」とも思ったが、ルートファインディングは常に的確だった。

テールリッジ最下部（雪渓との接点）まで、須田Lは徹底して懸垂下降を多用した。懸垂下降の順番待ちでトータルの時間がかかったが、その時間と引き換えにわれわれは安全を手中にしたのだと思う。夜中の2時に下山というのは体裁が悪いが、安全と生命には代えがたく、「何が重要か」の判断を誤ることはなかった。

(同行者コメント：前田)

去年の南稜よりかなりの時間を要した。違いはやはり雨であろう。濡れた岩は信用することができず、登るのをためらう。天候でグレードが変わるといふ、自然相手の面白さであるとは思ふ。今回、約24時間近く行動し続けた訳だが、意外と自分に体力があったことにも驚いた。また、特に危険だったこともなく、安全に落ち着いて行動できたのは須田リーダーの判断の良さであったと思う。今回、リーダーの補助がもっとできたのではないかと悔やむこともあるが、知識と経験を積んで、成長しなければならないと思う山行でした。

(同行者コメント：大山)

私にとって今回が初めてのクライミング本番であったが、当初予定の衝立岩中央稜から烏帽子沢南稜になったことは幸いであった。朝方からの雨で岩は濡れていて決してベストなコンディションではないものの、ルートさえ外さなければ登攀自体はそれほど難しい箇所はなかったからである。しかし、ジムでのフリークライミングとは異なり、アルパインクライミングでは実際にやることが多い。リードはもちろん大変だが、セカンドでもパートナーの確保、ロープ整理などなど。さらに、今回の6ルンゼ懸垂下降も、疲れた体にはかなり堪えた。今回、リーダメンバー4人と行動を共にしたが、登攀、ロープワークだけでなく、下山のルートファインディング、体力は言うまでもなく、装備品や行動食の内容に至るまで、自分に足りないものを知る良い機会となった。

(同行者コメント：小山田)

岩が濡れている、雨が降ってくる、暗い、寒い、という状況下で行動しなければならないとなったときに、頼りになるのは仲間と自分の精神力だけでした。ただ、前に行く須田リーダーのルートどりに不安なところはなく、正直、危険を感じる場面はほぼなかったように思います。メンバーには感謝しかありません。初めての本チャンでのリードは確かに嬉しく楽しいものでしたが、反省点だらけで、力量不足が身に沁みました。でもやっぱり岩登りは楽しいです。訓練あるのみです。